

因子負荷量（青枠の部分）とは因子（構成概念）が項目に影響を及ぼす度合いを示すものである。因子と項目との関連の強さと換言できる（とはいえ、厳密に言えばパス図での矢印の方向が示すように、因子が項目に影響を及ぼす度合いであることは忘れないように）。一般的に「.350」以上が基準となる。
共通性（赤枠の部分）とは想定している因子で項目の分散がどの程度説明できるかを示すものである。一般的に「.200」以上が基準となる。 平たく言えば、因子負荷量と共通性はいずれも因子と項目との関連の強さを示すという点で似ているということになる。

- 確認的因子分析を含む構造方程式モデリング（SEM）についてより深く学びたい学生は以下の図書を参照してください。 確認的因子分析・信頼性・妥当性・構造方程式モデリングについての専門書ですが、数式はほとんど出てこず、かつ文章表現は学部生向けでとても分かりやすく書いてあります。

パーソナリティ心理学のための統計学[心理学のための統計学6]
 新刊
 構造方程式モデリング



パーソナリティ心理学で特に使用頻度の高い統計手法を取り上げた2色刷りのテキスト。論文執筆を想定して解説した実践的なテキスト。

著者	尾崎 幸謙 著 荘島 宏二郎 著
ジャンル	心理学一般
シリーズ	心理学のための統計学
出版年月日	2014/09/10
ISBN	9784414301922
判型・ページ数	B5・140ページ
定価	本体2,600円+税
在庫	在庫あり

ネット書店を選択

[>> この本に関するお問い合わせ・感想](#)

- 関連して、HADでSEMを行う場合は以下の本を参照してください(149頁から158頁)。マニュアルとして使えます。こちらもおススメです。

個人と集団のマルチレベル分析 新刊



階層性をそなえたネスト化されたデータから新たな洞察や発見を掘り起こすために必須な統計処理をフリーソフトを使って展開する。

著者	清水 裕士 著
ジャンル	心理学 > 心理統計 数理・統計学
出版年月日	2014/10/01
ISBN	9784779508776
判型・ページ数	B5・200ページ
定価	本体2,800円+税

ネット書店を選択

補足事項

v1 から v5 がひとつの構成概念 (F1), v6 から v10 がもうひとつの構成概念 (F2) を測定している、つまり因子が 2 つ想定されると設定した場合、以下の結果が出力されると思います。試しに分析してみてください。確認的因子分析の意味合いがより分かると思います。

確認的因子分析			
推定法 = 最尤法			
サンプルサイズ	200		
パラメータ数	21		
モデル適合度			
	推定	独立	
χ^2 乗値	29.532	979.724	
DF	34	45	
p値	.686	.000	
CFI	1.000		
RMSEA	.000		
SRMR	.029		
AIC	71.532		
BIC	140.797		
CAIC	140.901		
因子パターン ※因子負荷量のサイズでソートしています			
項目	Factor1	Factor2	共通性
v1	.746	.000	.557
v5	.736	.000	.542
v4	.729	.000	.531
v2	.723	.000	.523
v3	.683	.000	.467
v8	.000	.831	.690
v6	.000	.794	.631
v7	.000	.772	.596
v9	.000	.751	.563
v10	.000	.715	.512
信頼性係数 ※ α 係数と ω 係数は太字の項目から計算(負荷量が負のものは逆)			
	Factor1	Factor2	
α係数	.846	.881	
ω係数	.846	.883	
逆転しない場合の信頼性係数			
	Factor1	Factor2	
α 係数	.846	.881	
ω 係数	.846	.883	
因子間相関			
	Factor1	Factor2	
Factor1	1.000	.699	
Factor2	.699	1.000	

CFIは最大1.000で、RMSEAは最小が.000です。SRMRも.05以下で良好な値を示しています。今回のモデルは非常に当てはまりが良いということになります。

α 係数も算出されます。この部分の信頼性係数は逆転項目があった場合に、それを逆転し、得点の方向性を一致させたものです。

因子間相関とは字義通りの意味です。「因子 F1 と因子 F2 との間の相関」を意味します。今回の場合は「.699」と正の相関があるということです。